八、宗門では「信心の血脈は枝葉」「法体の血脈こそ根本」として、「信徒の成仏は法主によって決まる」と主張しているのではないか

宗門では、「信心の血脈は枝葉である」などと主張したことはありませんが、血脈に「法体の血脈」と「信心の血脈」の立て分けが存在するということは日蓮正宗における不変の教義です。

創価学会でも以前、『生死一大事血脈抄』に説かれる血脈について、

「もとより血脈には、唯授一人の別しての法体の血脈と、総じての信心の血脈とがあり、ここで仰せられているのは、総じての信心の血脈であることはいうまでもない」（学会版御書講義三〇上―三二ページ）

と解釈していました。

にもかかわらず、現在の創価学会は、「唯授一人の法体の血脈」を否定して「信心の血脈」のみで良しとする血脈論を主張していますが、これは大聖人の御教示に背く大謗法の論です。

「法体の血脈」とは、日蓮大聖人が末法万年の一切衆生を成仏に導くために、仏法の奥義すなわち本門戒壇の大御本尊を日興上人お一人に相伝された唯授一人の血脈をいいます。この唯授一人の血脈は、日興上人から日目上人、さらに日道上人へと伝えられ、現在、第六十八世日如上人へと伝えられています。

この唯授一人の血脈に随順し、本門戒壇の大御本尊を無二に信ずる人に流れかようのが「信心の血脈」です。したがって、唯授一人の血脈を離れて「信心の血脈」はありませんし、衆生個々の成仏は、この信心の血脈が流れることによって初めて叶うのです。

また、宗門では「信徒の成仏は法主によって決まる」などと主張したことは一度もありません。

日蓮正宗の教えは、唯授一人の血脈に随順し、本門戒壇の大御本尊を信じなければ成仏は叶わないというものです。

したがって、創価学会の言い分は日蓮正宗の教義信仰を故意に歪曲し、いかにも御法主上人が、権威をもって信徒を抑圧しているかのように見せかけるための悪宣伝なのです。